

【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
(例)唇《くちびる》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号  
(例)中々|利《き》

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定  
(例)[ #地から1字上げ](大正十五年八月十二日)

これは近頃Nさんと云う看護婦に聞いた話である。Nさんは中々|利《き》かぬ氣らしい。いつも乾いた唇《くちびる》のかげに鋭い犬歯《けんし》の見える人である。

僕は当時僕の弟の転地先の宿屋の二階に大腸加答児《だいちょうかたる》を起して横になっていた。下痢《げり》は一週間たってもとまる氣色《けしき》は無い。そこで元来は弟のためにそこに来ていたNさんに厄介《やっかい》をかけることになったのである。

ある五月雨《さみだれ》のふり続いた午後、Nさんは雪平《ゆきひら》に粥《かゆ》を煮ながら、いかにも無造作《むぞうさ》にその話をした。

×

×

×

ある年の春、Nさんはある看護婦会から牛込《うしごめ》の野田《のだ》と云う家《うち》へ行《ゆ》くことになった。野田と云う家には男主人はいない。切《き》り髪《がみ》にした女隠居《おんないんきょ》が一人、嫁入《よめい》り前《まえ》の娘が一人、そのまた娘の弟が一人、あとは女中のいるばかりである。Nさんはこの家《うち》へ行った時、何か妙に氣の滅入《めい》るのを感じた。それは一つには姉も弟も肺結核《はいけっかく》に罹《かか》っていたためであろう。けれどもまた一つには四畳半の離れの抱えこんだ、飛び石一つ打ってない庭に木賊《とくさ》ばかり茂っていたためである。實際その夥《おびただ》しい木賊はNさんの言葉に従えば、「胡麻竹《ごまだけ》を打った濡《ぬ》れ縁さえ突き上げるように」茂っていた。

女隠居は娘を雪《ゆき》さんと呼び、息子《むすこ》だけは清太郎《せいたろう》と呼び捨てにしていた。雪さんは氣の勝った女だったと見え、熱の高低を計《はか》るのにさえ、Nさんの見たのでは承知せずに一々検温器を透《す》かして見たそうである。清太郎は雪さんとは反対にNさんに世話を焼かせたことはない。何《なん》でも言うなりになるばかりか、Nさんにもものを言う時には顔を赤めたりするくらいである。女隠居はこう云う清太郎よりも雪さんを大事にしていたらしい。その癖病氣の重いのは雪さんよりもむしろ清太郎だった。

「あたしはそんな意気地《いくじ》なしに育てた覚えはないんだがね。」

女隠居は離れへ来る度に(清太郎は離れに床《とこ》に就《つ》いていた。)いつもつけつけと口小言《くちこごと》を言った。が、二十一になる清太郎は滅多《めった》に口答えもしたこともない。ただ仰向《あおむ》けになったまま、たいていはじっと目を閉じている。そのまた顔も透《す》きとおるように白い。Nさんは氷嚢《ひょうのう》を取り換えながら、時々その頬《ほお》のあたりに庭一ぱいの木賊《とくさ》の影が映《うつ》るように感じたと云うことである。

ある晩の十時|前《まえ》に、Nさんはこの家《うち》から二三町離れた、灯《ひ》の多い町へ氷を買いに行った。その帰りに人通りの少ない屋敷続きの登り坂へかかると、誰か一人《ひとり》ぶらさがるように後ろからNさんに抱《だ》きついたものがある。Nさんは勿論びっくりした。が、その上にも驚いたことには思わずたじたじとなりながら、肩越しに相手をふり返ると、闇の中にもちらりと見えた顔が清太郎と少しも変わらないことである。いや、変わらないのは顔ばかりではない。五分刈《ごぶが》りに刈った頭でも、紺飛白《こんがすり》らしい着物でも、ほとんど清太郎とそっくりである。しかしおとといも喀血《かっけつ》した患者《かんじゃ》の清太郎が出て来るはずはない。況《いわん》やそんな真似《まね》をしたりするはずはない。

「姐《ねえ》さん、お金をおくれよう。」

その少年はやはり抱《だ》きついたまま、甘えるようにこう声をかけた。その声もまた不思議にも清太郎の声ではないかと思うくらいである。氣丈《きじょう》なNさんは左の手にしっかり相手の手を抑えながら、「何です、失礼な。あたしはこの屋敷のものですから、そんなことをおしなさんと、門番の爺《じい》やさんと呼ばま

すよ」と言った。

けれども相手は不相変《あいかわらず》「お金をおくれよう」を繰り返している。Nさんはじりじり引き戻されながら、もう一度この少年をふり返った。今度もまた相手の目鼻立ちは確かに「はにかみや」の清太郎である。Nさんは急に無気味《ぶきみ》になり、抑えていた手を緩《ゆる》めずに出来るだけ大きい声を出した。

「爺やさん、来て下さい！」

相手はNさんの声と一しょに、抑えられていた手を振りもぎろうとした。同時にまたNさんも左の手を離した。それから相手がよろよろする間《ま》に一生懸命に走り出した。

Nさんは息を切らせながら、（後《あと》になって気がついて見ると、風呂敷《ふるしき》に包んだ何斤《なんぎん》かの氷をしっかりと胸に当てていたそうである。）野田の家《うち》の玄関へ走りこんだ。家の中は勿論ひっそりしている。Nさんは茶の間《ま》へ顔を出しながら、夕刊をひろげていた女隠居にちょっと間《ま》の悪い思いをした。

「Nさん、あなた、どうなすった？」

女隠居はNさんを見ると、ほとんど詰《なじ》るようこう言った。それは何もけたたましい足音に驚いたためばかりではない。実際またNさんは笑ってはいても、体の震《ふる》えるのは止《と》まらなかったからである。

「いえ、今そこの坂へ来ると、いたずらをした人があったものですから、……」

「あなたに？」

「ええ、後《うしろ》からかじりついて、『姐《ねえ》さん、お金をおくれよう』って言って、……」

「ああ、そう言えばこの界限《かいわい》には小堀《こぼり》とか云う不良少年があつてね、……」

すると次の間《ま》から声をかけたのはやはり床《とこ》についている雪さんである。しかもそれはNさんには勿論《もちろん》、女隠居にも意外だったらしい、妙に陰《けん》のある言葉だった。

「お母様《かあさま》、少し静かにして頂戴《ちょうだい》。」

Nさんはこう云う雪さんの言葉に軽い反感と云うよりもむしろ侮蔑《ぶべつ》を感じながら、その機会に茶の間《ま》を立て行つた。が、清太郎に似た不良少年の顔は未《いま》だに目の前に残っている。いや、不良少年の顔ではない。ただどこか輪郭《りんかく》のぼやけた清太郎自身の顔である。

五分ばかりたった後《のち》、Nさんはまた濡《ぬ》れ縁《えん》をまわり、離れへ氷嚢《ひょうのう》を運んで行つた。清太郎はそこにいないかも知れない、少くとも死んでいるのではないか？ そんな気もNさんにはしないではなかった。が、離れへ行って見ると、清太郎は薄暗い電燈の下《した》に静かにひとり眠っている。顔もまた不相変《あいかわらず》透きとおるように白い。ちょうど庭に一ぱいに伸びた木賊《とくさ》の影の映《うつ》っているように。

「氷嚢をお取り換え致しましょう。」

Nさんはこう言いかけながら、後ろが気になってならなかった。

×

×

×

僕はこの話の終った時、Nさんの顔を眺めたまま多少悪意のある言葉を出した。

「清太郎？ ですね。あなたはその人が好きだったんでしょう？」

「ええ、好きでございました。」

Nさんは僕の予想したよりも遥《はる》かにさっぱりと返事をした。

[ # 地から1字上げ ] (大正十五年八月十二日)

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年2月1日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。